

# ロマンシュ語スルシルヴァ方言の助動詞の選択性 ～フランス語及びイタリア語との対照から～

坂口 友弥

SAKAGUCHI Tomoya

## 1. はじめに

本稿では、ロマンシュ語スルシルヴァ方言<sup>1)</sup>の自動詞の迂言過去時制における助動詞 HAVE と BE の選択性を考察する。この助動詞の選択性は、Split Intransitivity と呼ばれる文法現象である。Split Intransitivity<sup>2)</sup>とは、自動詞の迂言形式によって過去が表される際に、表れる助動詞が1つではなく、2つ表れる現象を指す。

本稿の枠組みとして、助動詞選択の勾配 Auxiliary Selection Hierarchy<sup>3)</sup>の枠組みを用いた先行研究 Sorace (2000)及び Legendre (2007a)<sup>4)</sup>を参照する。ASHは通言語的な助動詞の分布<sup>5)</sup>の傾向を示したものである。本稿では、まずロマンシュ語スルシルヴァ方言における助動詞の勾配を同言語内で検討する。次に、本言語と同じロマンス諸語に属するフランス語、イタリア語の助動詞の勾配をロマンシュ語の助動詞選択の勾配と対照し考察を行う。

## 2. 問題提起、先行研究、並びにコーパスについて

本章では、調査の前の段階について述べる。1節では本稿の研究意義を述べ、2節では Legendre (2007a)にある ASH に基づいてイタリア語及びフランス語の助動詞の分布を概観し、3節では本稿の調査方法を提示する。

2.1. 本稿では、現在まで取り扱われてこなかったロマンシュ語を取り扱うことにより、助動詞の選択性の分野において新しい視野を取り入れることができると考えている。

2.2. 本節では、ASH を概観し、フランス語及びイタリア語の助動詞の分布を概観する。以下の表は、フランス語及びイタリア語における ASH を示したものである。(表 1) なお、先行研究と同様に統一する目的により、動詞並びに助動詞を英語表記とした。

動詞のクラス	サブカテゴリー	動詞	フランス語	イタリア語
1) change of location		arrive	BE	BE
		come	BE	BE
2) change of state	a) change of condition	die	BE	BE
	b) appearance	appear	BE/HAVE	BE
		disappear	BE/HAVE	BE
	c) indefinite change in a particular direction	go up	BE/HAVE	BE
		go down	BE/HAVE	BE
		wilt	HAVE	BE
	worsen	HAVE	BE/HAVE	
3) states	a) continuation of pre-existing state	last	HAVE	BE/HAVE
	b) existence of state	be (location)	HAVE	BE
		exist	HAVE	BE/HAVE
		suffice	HAVE	BE
4) uncontrolled processes	a) emission	resound	HAVE	BE/HAVE
	b) involuntary actions	shiver	HAVE	BE/HAVE
	c) bodily functions	sweat	HAVE	HAVE
5) controlled processes	a) motional	swim	HAVE	BE/HAVE
	b) non-motional	work	HAVE	HAVE
		yell	HAVE	HAVE

表 1 フランス語及びイタリア語/助動詞の選択 (Legendre, 2007a)

Legendre (2007a)では、表1のように1) change of location、2) change of state、3) states、4) uncontrolled processes、5) controlled processes と5つの動詞のクラス<sup>9)</sup>に、母語話者<sup>7)</sup>の容認度を基準として分類した。加えて、この動詞の5つの動詞のクラスを表1に示すようなサブカテゴリー<sup>8)</sup>に細分した。その上で、動詞のクラスの1番上に位置する change of location は助動詞 BE を、1番下に位置する non-motional controlled processes は助動詞 HAVE を頻繁に取る core verbs とした。一方、core verbs 以外の周動的な動詞を non-core verbs とした。さらに、Sorace (2004: 262)は cut-off point は言語によって異なるとしている。加えて、cut-off point は core verbs にはなく、non-core verbs にあるとしている。core verbs は文に表れる副詞などのアスペクトに影響を受けず、一貫して助動詞 BE または助動詞 HAVE を選択する。それに対して、non-core verbs は文に表れる副詞などのアスペクトの影響を受けやすく、助動詞 BE と助動詞 HAVE の選択の揺れ<sup>9)</sup>があるとした。さらに、Sorace (2000)は助動詞 BE から助動詞 HAVE に切り替わる境界を cut-off point と呼んだ。この cut-off point は言語によって異なる。上記表1に示すように、フランス語では die(死ぬ)と appear(現れる)に相当する動詞の間が、イタリア語では wilt(枯れる)と worsen(悪化する)に相当する動詞の間がそれぞれ cut-off point である。

2.3. 本節では、調査方法について述べる。言語資料には、地方紙 La Quotidiana<sup>10)</sup>のアーカイブを用い、検索範囲を 1996/7/1 から 2012/10/31<sup>11)</sup>までとした。検索事項は、ロマンシュ語スルシルヴァ方言の3人称単数男性形(形態素-us)及び女性形(形態素-a)と自動詞の過去分詞の組み合わせに限定した。集計時には、助動詞 BE/HAVE のどちらかと共起している例文を抜き出し分析を行った。以上のように検索事項を限定した上で、出現しうるものすべてを調査した。今回の調査では、コーパスの出現数は配慮せず、出現の可否のみを配慮した。

### 3. ASH における例文と考察

本章では、Legendre (2007a)を参照して ASH の各動詞につき各1文を例示する。加えて、そのサブカテゴリーに属する動詞が、助動詞 HAVE または BE のどちらを選択するかについて述べる。1節では1) change of location を、2節では2) change of state を、3節では3) states を、4節では4) uncontrolled processes を、5節では5) controlled processes について概観し考察する。尚、1) change of location にはサブカテゴリーがなく、動詞のクラスのみが存在する。

3.1. 本節では、1) change of location のカテゴリーについて考察する。ここでは、動詞 arrivar (到着する)と動詞 vegnir (来る)の2つの動詞について調べた。その結果、動詞 arrivar (到着する)及び動詞 vegnir (来る)において、助動詞に BE のみを取ることが見られた。(例文(1), (2))

(1) Joyce ei<sup>12)</sup> arrivaus ils 17 da december 1940 a Turitg...

Joyce BE arrived the 17 of December 1940 at Zurich 「ジョイスは1940年12月17日にチューリッヒに着いた」

(2)...la famiglia Brügger ei vegnida a Rickenbach/Sviz...

the family Brügger BE come to Rickenbach/Sviz 「ピリュエーガー家はリッケンバッハ(別名シュビッツ)に来た」

3.2. 本節では、2) change of state のカテゴリーについて考察する。まず同カテゴリー内の change of condition

において、動詞 murir (死ぬ)、動詞 cumparer (現れる)、動詞 desaparar (消える)の3つの動詞について調べた。

(例文(3), (4), (5))

(3) Martini ei morts il venderdis, ils 31 d'uost  
Martini BE dead the Friday the 31 of/August 「マルティーニは8月31日の金曜日に死亡した」

(4) La nova brochura da stad... ei cumparida.  
the new brochure of summer BE appeared 「夏の新しいパンフレットが刊行された」

(5) Cun otg onns ei la malsogna disparida.  
with eight years BE the disease disappeared 「8年後に病気は消えた」

次に、同カテゴリー内の indefinite change in a particular direction について述べる。ここでは、動詞 ir si (上る)、動詞 ir giu (下る)、動詞 sflurir (枯れる)、動詞 pigiurar (悪化する)の4つの動詞について調べた。(例文(6), (7), (8), (9))

(6) Dunna Dorina ei ida sil vitg  
Ms. Dorina BE gone up/the village 「ドリーナさんは村に上がっていった」

(7) Elena ei ida giu ad Yverdon.  
Elena BE gone down to Yverdon 「エレナはイヴェルドンに下っていった」

(8) la flura... ei sflurida.  
the flower BE wilted 「その花は枯れた」

(9) Leu ei il scaldament pigiurus.  
there BE the heating worsen 「暖房はよりいっそう壊れてしまった」

change of state の動詞の計7つに関して、サブカテゴリーの違いを超えて、助動詞 BE のみを選択するという結果となった。

3.3. 本節では、3) states のカテゴリーについて考察する。同カテゴリーのサブカテゴリーである continuation of pre-existing state を見てみると、動詞 cuzzar (続く)の動詞を同カテゴリーの existence of state の動詞 star (いる)、動詞 existir (存在する)、動詞 bastar (十分である)の計3つに関して調べた。その結果、動詞 cuzzar (続く)、動詞 existir (存在する)、動詞 bastar (十分である)の3つの動詞において助動詞 HAVE のみを選択し、動詞 star (いる)において助動詞 BE のみを選択するということが分かった。(例文(10), (11), (12), (13))

(10) La conferenza a Sogn Gagl ha cuzzau quater dis.  
the conference at Sogn Gagl HAVE lasted four days 「ソンニユガルの会議は4日間続いた」

(11) El ei staus en Frontscha.  
he BE been in France 「彼はフランスにいた」

(12) L'organisaziun ha existiu exact 40 onns...  
the/organization HAVE existed exact 40 years 「そのグループはちょうど40年間存在した」

(13) ...ei ha bastau cun mia atgna constataziun...

it HAVE sufficed with my own observation

「私自身の観察には十分であった」

したがって、助動詞 BE から助動詞 HAVE に変遷する cut-off point は、カテゴリー3) states の動詞 piggiurar (悪化する)と動詞 cuzzar (続く)の間にある。

ここで、動詞 star (いる)が例外的に助動詞 BE を取っていることについて、Sorace (2000: 868)は以下のよう述べている。“The verb *remain* represents a significant exception, in that it selects BE across languages.”

しかしながら、汎言語的現象と述べているがどの言語の言及しているか不明であること、イタリア語の動詞 star を英語の動詞 remain と対応させているが実際には両動詞の用法は異なるため、この問題については今後考えていく必要がある。

3.4. 本節では、4) uncontrolled processes のカテゴリーについて考察する。同カテゴリー内の emission の項目を見ると、動詞 resunar (鳴り響く)を、involuntary action では動詞 tremblar (震える)を、bodily functions では動詞 suar (汗をかく)について調べた。その結果、動詞 resunar (鳴り響く)は、助動詞 BE 及びに助動詞 HAVE を選択し、動詞 tremblar (震える)、動詞 suar (汗をかく)の2つの動詞は、助動詞 HAVE のみを選択するということが分かった。(例文(14), (15), (16), (17))

(14) A Selva ha la musica resunau treis dis...

at selva HAVE the music resounded three days

「セルヴェアでは3日間音楽が鳴り響いた」

(15) Cu il davos tun ei resunau ein ils auditors sesalzai ed han sbaltschau freneticamein.

when the back sound BE resounded be the auditors flown away and have applauded frenetically

「バックミュージックが鳴り響くと、観客は飛び上がって熱狂的に拍手をおくった」

(16) El ha tremblau dil freid.

he HAVE trembled of/the coldness

「彼は寒さで震えた」

(17) Schebein Simon Bundi ha suau pervia dallas damondas.

though Simon Bundi HAVE sweat due to/the questions

「シモン・ブンディはその質問のせいで汗をかいていたのだが」

したがって、表1の中で last (続く)に相当する動詞より下にある動詞すべてにおいて、助動詞 HAVE を選択するという結果となった。しかしながら、なぜ resunar (鳴り響く)は助動詞 BE と助動詞 HAVE のどちらも選択することができるのであろうか。これは、例文(14)の副詞句が表す telicity<sup>13)</sup>に説明を求めることができる。例文(14)では treis dis (3日間)という副詞句により継続的な行為を表すため atelic となり、助動詞 HAVE が用いられる。逆に、例文(15)は副詞句 cu (～の時)と動詞 resunar (鳴り響く)が表れる文であるため、非継続的な行為を表し telic となり、助動詞 BE が用いられる。余談であるが、動詞 selazar (飛び上がる)は再帰動詞であるため、例外なく助動詞 BE を取る。ここでは、ein (BE 動詞の3人称複数)を取っている。

3.5. 本節では、5) controlled processes のカテゴリーについて考察する。同カテゴリーの motional では動詞

senudar (泳ぐ)を、non-motional では動詞 *lugar* (働く)と動詞 *grir* (叫ぶ)を調べた。その結果、動詞 *senudar* (泳ぐ)では助動詞 BE のみを選択し、動詞 *lugar* (働く)、動詞 *grir* (叫ぶ)では助動詞 HAVE のみを選択するということが分かった。(例文(18), (19), (20))

(18) L'atleta da 22 onns ei senudada duront las empremas treis rundas a 2,5km  
 the/athlete of 22 years BE swum during the first three rounds at 2,5km

「22歳のアスリートは2.5kmの距離に相当する初めの3周を泳いだ」

(19) Gion Paul ha lugar biars onns...

Gion Paul HAVE worked many years

「ジョン・ポールは長年働いた」

(20) ...el ha griu tut dad ault...

he HAVE yelled all of high

「彼は声高に叫んだ」

したがって、motional processes である動詞 *senudar* (泳ぐ)は助動詞 BE を選択し、non-motional processes である動詞 *lugar* (働く)、動詞 *grir* (叫ぶ)は助動詞 HAVE を選択するという結果となった。一見すると、表1の HAVE と BE を区分する cut-off point よりもはるか下に位置する動詞 *senudar* (泳ぐ)が助動詞 BE を取るのは奇妙に思えるが、イタリア語では助動詞 BE 並びに HAVE のどちらも選択するため、ロマンス語内においてヴァリエーションが見られると考えられる。

#### 4. まとめ

本章では、3章の結果を以下表にまとめ、先行研究にあるフランス語及びイタリア語との対照によって導き出された特徴を3点述べる。以下、3章で概観したロマンス語の Split Intransitivity をまとめた表である。ここでも、表1と同様、統一する観点により動詞並びに助動詞の欄において英語表記を採用する。

動詞のクラス	サブカテゴリー	動詞	ロマンス語
1) change of location		arrive	BE
		come	BE
2) change of state	a) change of condition	die	BE
	b) appearance	appear	BE
		disappear	BE
	c) indefinite change in a particular direction	go up	BE
		go down	BE
wilt		BE	
	worsen	BE	
3) states	a) continuation of pre-existing state	last	HAVE
	b) existence of state	be (location)	BE
		exist	HAVE
		suffice	HAVE
4) uncontrolled processes	a) emission	resound	BE/HAVE
	b) involuntary actions	shiver	HAVE
	c) bodily functions	sweat	HAVE
5) controlled processes	a) motional	swim	BE
	b) non-motional	work	HAVE
		yell	HAVE

表2 ロマンス語/助動詞の選択

1点目において、ロマンス語の cut-off point はフランス語及びイタリア語の cut-off point よりも低く、カテゴリーstates の continuation of pre-existing states の動詞 *cuzzar* (続く)から助動詞 HAVE が出現する。2点目において、ロマンス語の自動詞における助動詞の分布はイタリア語の助動詞の分布と多くの部分で共通している。しかしながら、動詞 *senudar* (泳ぐ)の助動詞の分布が異なる。ロマンス語では動詞 *senudar* (泳

ぐ)は助動詞 BE のみを取るが、イタリア語では *senudar* (泳ぐ)に相当する動詞は助動詞 BE と HAVE のどちらも取りうる。

## 5. 展望

本稿では、Sorace (2000) 並びに Legendre (2007)に忠実に従い先行研究の表をそのまま採用することに留まったが、最終的にはなぜ助動詞に2項対立性が存在するのかについて明確にしていきたいと考えている。加えて、動詞のクラス並びにサブカテゴリーに関連付けられた動詞の分類が曖昧なため、更なる枠組みが必要であると感じた。以上2点を今後の研究の展望とする。

### 注記

- 1) ロマンシュ語にはスルシルヴァ *Sursilvan* 方言の他に、ストシルヴァン *Sutsilvan* 方言、スルミラン *Surmiran* 方言、ヴァラーデル *Vallader* 方言、ビュテール *Puter* 方言がある。ここでは、この5つの方言の中で1番話者数の多い、スルシルヴァ方言を代表させ、ロマンシュ語とする。以前まで *Sursilvan* の方言についてスルセルヴァやスルシヴァンなど複数の呼び名が存在したが、参考文献に記載の河崎 (2014) を出版する際に、筆者の間でスルシルヴァ方言とすることで合意した。これは、元々地方の名前を表す *Sursilva* スルシルヴァに形容詞の接頭辞 *-n* をつけることより、スルシルヴァ方言と呼ぶことが妥当であるという結論に達した。
- 2) 通言語的に見ると、すべての言語において迂言過去の用法において、助動詞の対立が見られるわけではない。スペイン語では *haber* (HAVE)、カタルーニャ語では *haver* (HAVE)、ポルトガル語では *ter* (HAVE) となり、助動詞 HAVE のみをとる。助動詞の対立が見られる言語は、イタリア語 *essere* (BE) と *avere* (HAVE)、フランス語 *être* (BE) と *avoir* (HAVE)、ドイツ語 *sein* (BE) と *haben* (HAVE) などがある。
- 3) 以後、助動詞の勾配 *Auxiliary Selection Hierarchy* の略称である *ASH* とする。
- 4) *ASH* は Sorace (2000) によって発案されたものであるが、本稿では Legendre (2007a) の枠組みを中心に用いる。Sorace (2000) では、自他交替が起こる動詞までも取り扱われているためである。ここでは、そのような動詞を排除し調査を進める。両先行研究において、母語話者の容認度により研究が進められていること、さらに被験者が明示されていないことが問題点として挙げられる。しかしながら、両者の枠組みを用いて研究を進めた結果一定の一貫性が認められたため、本稿では暫定的にこの枠組みを採用する。
- 5) 例えば、イタリア語、フランス語、オランダ語及びドイツ語を対照させ *ASH* を発案した Sorace (2000)、フランス語及びイタリア語をドイツ語と対照させた Bentley and Eythósson (2003) や、*ASH* の枠組みを適応してイタリア語のバドヴァ方言を研究した Cennamo and Sorace (2007) やイタリア語とフランス語を対照させ *ASH* に加え最適理論を適用した Legendre (2007a)、中世スペイン語及び中世カタルーニャ語を取り扱った Mateu (2009) などが見られる。
- 6) 動詞クラス及びサブカテゴリーの意味の詳細について、Sorace (2000) を参照。
- 7) 主にイタリア語、フランス語、ドイツ語、オランダ語の各言語の母語話者の容認度を参考にしている。
- 8) 注6と同様
- 9) 本稿の3.4の動詞 *resunar* (鳴り響く) の分析を参照。
- 10) 新聞の掲載の文章語には、厳しい規範的フィルターがかかけられているということは承知で新聞のデータを本稿では採用した。実際に研究を進めていくうちに、一定量の助動詞の対立が見られたためである。
- 11) アーカイブの1番古い記事から、研究の開始までの期間である。
- 12) 見やすさを考慮したため、各文の助動詞の部分に太字で示した。
- 13) 本稿では、Sorace (2000) に従い、Tenny (1994:4) の *telicity* の定義を用いる。下記に示す *delimitedness* は *telicity* と同様の意味である。その定義は以下の通りである。  
“*Delimitedness* refers to the property of an event’s having a distinct, definite and inherent endpoint in time.”

### 参考文献

- Arnovich, Raúl (2007) *Split Auxiliary Selection from a Cross-Linguistic Perspective*. Benjamins.
- Bentley Delia and Eythósson Thórhullar (2003) “Auxiliary Selection and the Semantics of Unaccusativity”. *Lingua* 114.
- Cennamo Michela and Sorace Antonella (2007) “Auxiliary Selection and Split Intransitivity in Paduan: Variation and Lexical-Aspectual Constraints”. *Split Auxiliary Systems. A Cross-Linguistic Perspective*. ed. by Raúl Aranovich. Benjamins.
- Legendre, Géraldine (2007a) “On the Typology of Auxiliary Selection.” *Lingua* 117. 1522-1540. John Hopkins University. Elsevier B.V.
- (2007b) “Optimizing Auxiliary Selection in Romance.” *Split Auxiliary Systems* ed. by Aarnovich, Raúl. A Cross-Linguistic Perspective. Benjamins.
- Mateu, Jaume (2009) *Gradience and Auxiliary Selection in Old Catalan and Old Spanish*. Oxford University Press.
- Perlmutter, David M. (1978) “Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis.” 157-190. *Proceeding of the 4th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*.
- Sorace, Antonella (2000) “Gradients in Auxiliary Selection with Intransitive Verbs.” *Language volume 76-4*. 859-890. University of Edinburgh.
- (2004) “Gradience at the Lexicon-Syntax Interface: Evidence from Auxiliary Selection and Implications for Unaccusativity.” *The Unaccusativity Puzzle. Explorations of the Syntax-Lexicon Interface*. ed. by Artemis Alexiadou, Elena Anagnostopoulou and Martin Everaert. Oxford University Press.
- Spescha, Arnold (1989) *Grammatica Sursilvana*. Casa editura per mieds d’instrucziun.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer.
- 河崎靖、熊坂亮、ヨナス・ルエグ、坂口友弥 (2014) 『スイスロマンシュ語入門』、大学書林
- 参考ウェブサイト  
<http://www.vocubularisursilvan.ch/> (ドイツ語/ロマンシュ語スルシルヴァ方言辞書)  
<http://www.suedostschweiz.ch/> (地方紙 La Quotidianna)